

## 第2回 川崎市内最高峰の匠「かわさきマイスター」の活動

平成26年11月19日(水) 18:30~20:30

川崎区役所 7階 第1・第2会議室

伊原 正男氏(平成23年度認定マイスター[職種:内装仕上技能士]/有限会社インテリアいはら 取締役)

佐藤 達也氏(いんてりあ さとう 代表)

三原 宜輝(川崎市経済労働局労働雇用部担当係長)

### ■かわさきマイスターとは 川崎市経済労働局労働雇用部担当係長 三原 宜輝

#### (1)かわさきマイスターの概略

かわさきマイスターとは、さまざまな職種の一流の職人の方々を川崎市内最高の匠として認定させていただく制度です。マイスターは各職種のトップクラスの方々に、非常に素晴らしい技能をお持ちでいらっしゃいます。こうした技術・技能職者の方々は、産業の発展や市民生活を支える非常に重要な存在です。しかしながら、近年、こうした熟練労働者の方々が減少し、少子化や若者の「製造業離れ」が叫ばれており、国・県・市を挙げて、日本に不可欠な技能職振興を図っているところです。



〔三原 宜輝〕

### かわさきマイスターとは



- 川崎市内最高峰の匠
- 洋菓子、洋装、美容師、溶接、板金、旋盤など市内在住・在勤の一流の職人63職種81名の方々を「かわさきマイスター」として認定。
- 平均年齢70歳、40年以上一つの職種に従事してきた「ものづくり」の達人。




〔図1〕

かわさきマイスター創設の経緯ですが、川崎市は京浜工業地帯の中核を担い、「ものづくり都市」として発展を遂げてきました。しかしながら、平成2(1990)年に株価が大暴落、バブル景気が崩壊し、円高の進行に伴い、大手製造業は海外に生産拠点を移転しました。その結果、低価格の大量生産品が日本に流入し、中小製造業は海外進出するか、国内での生産規模を縮小するかといった厳しい選択を迫られ、また、自動化機械が大量導入されたことにより、生産工程の合理化が図られ、熟練労働者の減少や失業が相次ぎました。さらに、製造業に対するマイナスイメージ3K(きつい・汚い・危険)から、若者の製造業離れが進むなど、技術・技能職者を取り巻く環境が悪化していきました。そうしたなか、平成9(19

かわさきマイスターには、アジア圏で初めて美容師の世界チャンピオンになった方、日本のトップスケーターのフィギュアスケート靴をつくる方、今年2月にNHK番組で特集された洋菓子製造の方、「モヤモヤさまぁ〜ず」に出演した食品サンプル製作の方など、職種も技能も非常に多彩でバラエティに富んでおります。

現在、63職種81名の方々を認定しています。平均年齢は70歳で、半世紀以上お仕事をされてきた方達です。そして、マイスターの皆さんは、技術が素晴らしいだけでなく、人格者でもあります。一流の職人の方々ですが、常に技術の向上に努める謙虚な方々ばかりです。

### かわさきマイスター創設の経緯



☆平成9年:川崎市マイスター事業創設

- 川崎は「ものづくり都市」として発展
- 産業の発展や市民生活に技術・技能職者が不可欠

↓

<当時の状況>  
円高進行により大手メーカーの海外移転、低価格の輸入製品増加  
中小企業は後継者不足による廃業で熟練労働者の失業  
大企業でもリストラや省力化の影響で熟練労働者の減少  
少子化や若者の「製造業離れ」  
→技術・技能職者を取り巻く環境の悪化  
技術・技能の継承・育成が困難

〔図2〕

97)年にかわさきマイスター制度が創設されました。長年努力されてきた技術・技能職者の方々にスポットライトを浴びていただき、市民の皆様やマスコミなどに積極的にPRすることによって、職人の方々の社会的地位の向上を図り、技術・技能職のシンボリックな存在となっていただくことを目的としています。また、若い方々が持つ、技術・技能職に対するマイナスイメージや、将来像が持てないといった不安を、マイスターが自らの生き様や将来像を示すことによって払しょくする狙いもあります。

このような制度は、国でも昨年度からスタートし、東京都や愛知県、政令都市では本市以外に横浜市や神戸市など、製造業の盛んな都市で創設されています。本市のマイスター制度は、伊原氏を含めマイスターの方々に非常に積極的に活動いただいているおかげで、年々活性化し充実してきている状況です。

かわさきマイスターの役割は、ものづくり及び技術・技能職者への関心度や注目度を上げることです。市内の身近なところに、日本最高峰や世界トップクラスの技術・技能を持った方々がいらっしゃるということを是非市民の皆様を知っていただきたいと思えます。また、素晴らしい技術をお持ちですので、そうしたものづくり技術・文化の継承、振興・発展などを図るための活動にも取り組んでいただいています。

川崎市内最高峰の匠  
「かわさきマイスター」の役割



かわさきマイスター


- ・ものづくりへの関心向上
- ・技能、技能職者の注目度  
上昇、魅力向上
- ・匠の技能の継承
- ・卓越した技能の普及啓発
- ・収益力向上
- ・後継者育成
- ・技能職者の将来像揭示 等



[図3]

## (2) 応募条件、選考基準など

応募条件と選考基準



かわさきマイスター

《応募条件》

- 1 市内に1年以上在住または在勤し、優れた技術・技能を発揮している現役の技術・技能職者
- 2 年齢40歳以上、応募職種に勤続25年以上従事

《選考基準》

- 1 技術・技能が一般のものとは比べ極めて優れ、有効に活用され、欠くことが出来ないものか
- 2 現役であり、その職種に深い見識を持ち、今後も技を維持・発展できるか
- 3 技術・技能を市民に知ってもらうための市の事業に協力できるか

[図4]

募集から認定まで



かわさきマイスター

- 4月～5月 募集
- 5月末 推薦・応募締切
- 7月下旬～9月中旬 選考・調査
- 11月中旬 認定者発表

贈呈：報奨金50万円、テレビ・新聞等でのPR等



平成26年度  
かわさきマイスター  
認定者

[図5]

マイスター制度は、毎年募集し、選考・認定しています。応募条件・選考基準は、[図4]のとおりです。応募条件の②は、中学卒業後にその道に入った方が25年以上勤続された場合を想定し、年齢40歳以上と設定しています。

募集から認定までの流れは、[図5]のとおりで、[図5]の写真は、今年11月4日に発表したもので、翌日以降に各新聞社の地域版に写真入りで掲載されました。

今年は21名の方に応募いただき、4名の方が認定されました。全国各地のマイスター制度も、本市と似たような形で運用されていますが、各都市の応募者は毎年1桁台だと聞いております。川崎市のマイスター制度は、現認定者の素晴らしい活動のおかげで年々取組が充実し、知名度が向上してきた結果、応募者が増えてきている状況です。自薦・他薦を問わず毎年募集を行っていますので、是非皆様の周りに素晴らしい技術・技能を持っている方がおられましたら、ご推薦いただきたいと思います。

## かわさきマイスター認定者の活動



- 1 技能奨励・後継者育成・人材育成の取り組み
- 2 経済振興の取り組み

【図6】

また、毎年2月には、市の技術・技能職の拠点である「てくのかわさき」(高津区溝口)にて、「てくのまつり」を開催しています。今年度についてはマイスターの方が15名程出展されますので、皆様お時間があれば是非いらしてください。

学校への派遣については、小学校・中学校・高校・大学又は職業訓練校を訪問し、次世代を担う子ども達に一流の技を間近で見ってもらうことにより、ものづくりの素晴らしさを実感してもらおうという取組です。特に工業高校や職業訓練校における技術指導は、その道のプロが直接技術指導を行うことにより、後継者育成や人材育成を図ることも目的としています。

また、子ども達にもものづくりの素晴らしさを伝えるだけでなく、学校の先生方に技術・技能職の進路を理解してもらい、進路指導の一助としてもらうことも狙いの一つです。近年大学進学率が上昇していることもあり、学校の先生方も職人になる道を知りません。マイスターの方々が実際に訪問し、自らの生き様を伝えることによって、こういう道もあるということを学校の先生方や保護者の方に知ってもらう良い機会になります。

さらに、市民向けの講習会を開催しており、マイスターの指導の下でもものづくりを体験できる機会として、大人向け・子ども向けをそれぞれ開催しています。最近、海外展開も行っており、近年川崎の企業がベトナムなどアジア新興諸国に進出することが増えてきたことから、こうした国々の若者を対象に、日系企業に就職するための技術指導を現地で行っており、昨年度は「ベトナム若手技能者講習」を開催しました。

### (3) 経済振興の取組

経済振興の取組について、川崎市独自の取組として、もうかなければ後継者も入って来ないだろうということで、マイスターの方々により一層もうけていただくことを目的に、営業力・収益力向上の取組を行っています。その一つとして、マイスターの方々に参考にしていただこうと、研修会を開催しています。研修会では、全国有数の匠の技を持つさまざまな企業の事例を紹介するなど、営業力・収益力向上につながる取組などを紹介してもらっています。

### 経済振興の取組 1



- ・営業力、収益力向上の取り組み  
→研修会等の開催
- ・ものづくりへの取り組み  
→ものづくりの匠プロジェクト  
★全国でも川崎独自の取組  
マイスターの技能を集結した「ものづくり」



【図7】

また、これも川崎市独自の取組ですが、経済振興の取組の一つとして、「ものづくりの匠プロジェクト」という事業を行っています。これは、さまざまな職種のマイスターの技術・技能を結集し、いいものをつくろうというプロジェクトです。これまで、イベントへの出展や講習会については、一般消費者向け(BtoC)に商品を提供するマイスターの方々が中心となっており、企業向け(BtoB)に工場で製品を製造するマイスターの方々はなかなか参加できませんでしたが、このプロジェクトはこうした方達が活動に参加できる良い機会となりました。



## 経済振興の取組 1



平成25年9月4日(水) 川崎市に寄贈



【図8】

この時計を説明させていただくと、青い柱が3本あり、これは母なる川の多摩川と川崎をイメージしたものです。下に手のような形をした金属の彫刻があり、これはかわさきマスターのシンボルマークで、約150kgのアルミの立方体から削り出したものです。分銅式の置時計で、分銅は鮎の形をしており、分銅の鮎が上がったり下がったりする様子は、鮎の俎(そ)上をイメージしたものです。文字盤には「へら絞り」(平面状あるいは円筒状の金属板を回転させながら、「へら」と呼ばれる棒を押し当てて少しずつ変形させる金属加工手法)の技術を用いており、針の先端には高価なルビーが取り付けられています。この置時計は、新聞でも取り上げられたので、ご存知の方もいらっしゃるかと思います。

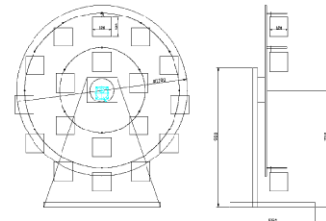
また、現在進行中のプロジェクトとして、1m程の大きさの観覧車を製作しています。近年こういった動きのある玩具は、安全面に配慮し、見るだけで触れてはいけないことが多いと思います。そこで、子ども達に実際に触れて感じてもらいたいと、触れても問題ない安全な構造となるように、試行錯誤を重ねながら、来年の完成を目指して作業を進めているところです。

## 経済振興の取組 1



現在、観覧車を製作中

- 子供達にマスターの技を体感してほしい
- 触っても安全な構造



【図9】

## 経済振興の取組 2



・ものづくりコーディネイト支援事業 ☆全国でも川崎独自の取組

マスターの技能の粋を尽くして製品化  
ものづくりに関心のある方への贈答品需要



・マスター訪問ツアー ☆全国でも川崎独自の取組

マスターがマスターの勤務先を訪問し、技術交流を促進



【図10】

このプロジェクトが最初に行った取組が、時計修復事業です。これは、「てくのかわさき」に保管されていた昭和20(1945)年代の置き時計をリニューアルしようと、ボランティアでマスターの方々が取組まれた事業です。参加いただいたマスターの方々は、ものづくりの素晴らしさを伝えたいと、本業でご多忙にも関わらず、無報酬で参加してくださいました。3年4か月にわたる長い期間を費やし完成したもので、時価総額はなんと1500万円にもなり、「てくのかわさき」のロビーで大切に展示しています。お時間のある方は是非ご覧ください。

また、経済振興の取組に、ものづくりコーディネイト支援事業というものがあります。マスターの方々は中小企業の方が多いため、基本的には顧客企業の注文を受け、指定された仕様どおりに製品をつくります。ただ、これではマスターの技能を全て生かすことが難しいため、マスターの方々が長年培った技能を尽くした消費者向けの製品をつくらうという事業です。[図10]の上段右側は、食品サンプル技術を用いた金魚で、左側が盃です。この盃は現在75,600円で販売しており、3点程販売実績があります。また、今年から海外展開もしており、中国の展示会へも出展しています。

## 経済振興の取組 2



### ・ものづくりコーディネート支援事業



¥75,600  
インターネットでの受注生産

今年度から海外への  
販促開始

[図11]

## 経済振興の取組 2



### ・ものづくりコーディネート支援事業 平成25年 伊原氏 衝立製作



[図12]

[図11]の写真右は、F1のエンジンバルブのレプリカです。このレプリカをつくったマイスターの方が勤務する企業で、昔F1のエンジンバルブをつくっていた経緯から、このレプリカがつくられました。これも先程の盃と同じ値段の75,600円で販売しています。[図12]は、同事業において、昨年伊原氏につくっていただいた衝立です。左側の家具技能士のマイスターの方が素晴らしい一品ものの衝立を製作し、伊原氏によって大変貴重な「足利銘仙」という平織りの絹織物を両面が異なる図柄になるように貼ったもので、凄技を持つマイスター同士が協力したからこそできた製品です。

また、マイスターに関する情報発信の取組として、「マンガでわかる！かわさきマイスター」というマンガを発行しています。本日皆様のお手元に伊原氏のページを抜粋してお配りしております。このマンガは、先程ご説明したマイスターの学校派遣事業の際、限られた講習時間のなかで、いかに子どもの興味を引き、マイスターの技能の素晴らしさを分かりやすく伝えるか、そうしたことを考えて中学生レベルの内容でつくられたものです。約60人に及ぶマイスターお一人おひとりにインタビューを行ってマンガをつくりました。インターネットで公開もしています。マンガの主人公になる機会はないと、マイスターの皆さんにも喜んでいただいているようです。また、マンガのなかにはマイスターご自身の会社の社名も多く出ているため、中小企業の方がマスメディアに社名が取り上げられる機会が少ないなかPRにもなっているというお言葉もいただいています。またご家族の方々にも喜んでいただけたという効果もあったようです。

さらに最近ではマイスターの方々の動画もつくっており、インターネット(YouTube)で公開しているので、そちらも是非ご覧いただければと思います。



[図13]

## その他の取組



### ・東日本大震災被災者支援活動

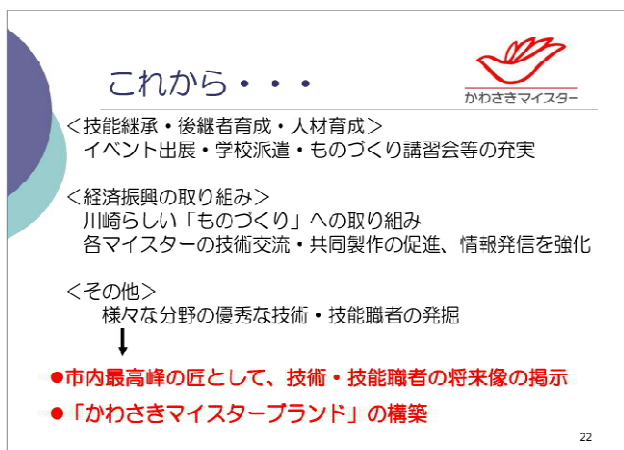
横溝春雄氏(リリエンベルグオーナーシェフ)  
平成22年5月 避難者対象に洋菓子教室  
平成23年以降 チャリティ洋菓子教室(浅谷氏・仲亀氏ご協力)



[図14]

その他の取組として、東日本大震災被災者支援活動を行っています。[図14]は、麻生区で洋菓子店リリエンベルグを営む横溝春雄氏により、被災者支援の一環として、洋菓子教室を開催した様子です。同氏は大変熱心に支援活動を行っておられ、ご自身も被災地に10回以上赴いておられます。川崎市がとどろきアリーナに被災者を受け入れた際も、同氏からご提案いただき、アリーナ近くの東京ガスの教室をお借りし、被災者の方に少しでも日常生活を取り戻してもらおうと、洋菓子教室を開催しました。平成23年以降も、浅谷氏・仲亀氏の両マイスターに協力してもらい、洋菓子教室を継続してボランティアで行っておられます。

#### (4) 今後のマイスター



[図15]

近年、製造業を取り巻く環境に変化が生じています。海外の生産コストの上昇や、国内製造業の生産性の向上によって、日本の製造現場は、国際的に遜色ないコスト水準を実現してきています。こうしたことから、国内に回帰する大手製造業も出てきました。現状の課題は後継者不足です。今後は、こうした課題の解決を目指し、マイスターの方々にご協力いただきながら、後継者育成や、ものづくり国日本の振興を図る取組をより一層充実させていきたいと考えます。そのためにも、マイスターの方々のさまざまな活動を積極的に情報発信し、さらなる知名度の向上を図っていききたいと思います。また、さまざまな取組の充実により、「かわさきマイスターブランド」を構築し、市民の皆様が川崎には素晴らしい技術・技能職者の方々がいると実感していただくとともに、マイスター志望者をますます増やしていきたいと思っています。

さて、[図16]は、今年6月に発行された経済評論家の藤沢久美氏の著書で、川崎市の中企業支援について書かれています。本には、とにかく現場を回り、企業の方の話をよく聴き、それを実践に生かす、そうした事例がいくつも書かれています。このマイスター事業も取り上げていただいています。もしよろしければお手にとって読んでいただければ幸いです。



[図16]



## ■講師紹介

伊原 正男氏:平成23年度認定かわさきマイスター 職種:内装仕上技能士  
壁紙を使用した内装工事に卓越した技能を保持している。

内装仕上の需要が和風から洋風へと変化する時代の中で、当初から壁装工事を重視し、たたみ皺(じわ)が出易い自然素材・エコウォールなどの皺(しわ)を防ぐ、丸めたたみ工法を発案するなど、高い技術・技能を発揮している。また、現在の職人に必要である、技の本質を正しく言葉で表現する巧みな話術にて、全国各地で講師を務めている。職人技の本質を体だけでなく、話術を備えて伝える活動をしているマイスターである。

川崎区在住。有限会社インテリアいはら(川崎区鋼管通1-1-9)  
経営



佐藤 達也氏 伊原 正男氏

### (1) 仕事をはじめたきっかけ

こんばんは、伊原と申します。実演までの間、私の経歴や仕事の話などをさせていただきたいと思います。

私と川崎区との接点は、元々は渋谷区の広尾で生まれ、そこに両親と住んでいたのですが、父親が結核になり、子どもにうつってはいけないということで、川崎の親戚の家に預けられたことが始まりでした。そして、約30年前に親しくしていたその親戚の面倒を見るために、家内とともに今の川崎区の住まいに移り住み、現在に至ります。

職人の世界に入ったきっかけは、母子家庭で育ったこともあり、早く社会に出て母を楽にしてあげたかったことがあります。また、子どもの頃の私は、机で勉強に向かうより手先を動かす方が性に合っていたこともあり、そんな私を見て「手に職をつけて生きていきなさい。」という母親の勧めでこの世界に入ったのです。本当は板前になりたかったのですが、母親に言うと、「お前にぴったりだね、でもやめておきなさい。お前にはもっと堅い商売の方がいい。」と助言を受け、表具師の世界に修行に入ることにしました。母は息子の弱点を見抜いていたのでしょね。自分の意思で進んだ道ではないですが、今は天職と実感することができ、今さらながら母の偉大さを思うとともに、感謝の念が湧いてきます。

私が職人の世界に入った当時が徒弟制度時代の最後の世代だったかと思います。知り合いを通じて修行に入りました。東京都文京区のお宿に修行に入ったのですが、修行するなら住込みでということで、布団や身の回りの必要なものだけ持って修行に入りました。5年間は修業期間で、2年間はお礼奉公ということで、7年間は住込みをしなくてははいけませんでした。若い時分は辛いと思うことも多くありましたが、とにかく母親の想いにこたえたい、その一心でやり抜きました。そうした修行期間を経て独立しました。

### (2) 内装業界の現状、現在の仕事内容など

50年前の満15歳で修行に入りましたので、職歴は50年になります。私が小僧の頃は、エンドユーザーたる地元住民のお客さんのもとへ出入りして仕事をするのが比較的多かったです。もちろんスーパーゼネコンと呼ばれる大手5社の建設会社さんからもいろいろと仕事をいただいたりしていました。当時は、どの現場の監督さんも、職人の立場を非常に重んじてくれまして、とにかく良い仕事をという強い気持ちを感じました。また、門や建物が重要文化財に指定されるような歴史あるお屋敷や、あるいは、今のファミリーレストランとは違い格式の高い個性ある料亭など、一流意識や高級感の漂う現場もたくさんあり、別世界を見るようで勉強になって楽しかったことを覚えています。

やがて高度経済成長期に突入すると、とにかく数量をこなして仕事量を上げなければいけない雰囲気、生産性がよく単価が安いものをよとする風潮に少しずつ変わってきました。我々職人も、ほとんどが下請けのような形で建築業者さんや不動産屋さんから仕事を受注する形に変わってきています。ですから、若い人達が夢を持ってこの業界へ入り、自分なりの工夫や努力で身を立ててやっていくことが難しくなっています。

私は、職業訓練校に指導に行っているのですが、学校の先生方から授業内容について、講師ごとに指導内容が異なる

と生徒が戸惑うので、なるべく均一な授業内容とするよう求められます。ある意味可もなく不可もないロボットをつくり出す雰囲気と似たように感じるときがあります。最近はそのようなところが非常に寂しく、個性を伸ばしづらい環境になってきているように思います。

内装仕上げという仕事は、体力勝負の仕事です。例えば、会議室の天井の壁紙を張る仕事では、窓の方から入口までの長さの、約90cm幅の一枚ものの壁紙を、足場を組んで脚立に上り、たった二人で張るのです。例えば、この講座の会場クラスの会議室ですと、朝から始めて午後3時くらいまでには終わらずよう依頼されます。ですから、相当な肉体労働になります。さすがに年をとれば無理も効かなくなってくるので、現場で培った技術を生かしながら、先程三原氏から紹介のあった衝立など、生活に役立つ工芸品などを手がけるようになりました。また、最近では、後進の方々の育成に励んでいます。後進の方々に対して、年を経て体力がなくなっても、しっかり技術を磨いて人生設計を立てれば、こんな生き方もあると示すことができれば、お世話になった方々へ少しでも恩返しになるのではないかと信じてやっております。

私の仕事は、工場でものづくりを行うのではなく、建物の内装工事を行う仕事なので、当然現場での作業になります。仕事を終われば次の現場に向かうわけで、絶えず仕事場が変わります。オーバーに言うと、北は北海道から南は九州まで、依頼があればどんな現場にも向かいます。いろいろな地方に行って、行く先々さまざまなことを感じることができます。また、お客様も当然そのときどき変わります。住宅の場合はお住まいのお客様、商業施設の場合はお店を運営する方の話をよく聴き、お客様の好みをいち早く把握し、それに沿うように作業します。こういう仕事をしていると、一流企業の社長さんをはじめ、いろいろな方々と出会うことができます。そこで作業している間はお客様でも、ある種対等な立場でお話できるということも非常に面白く勉強になります。一方ではお客様もさまざま、おつかない現場もあります。それもひっくるめて、この仕事をしているおかげで、いろいろな人や土地に出会うことができました。また、最近ソウルや北京、上海など海外から講習を依頼され、メーカーさんと一緒に行ったりします。そのときに思うのですが、世界には達人と呼ばれる職人の方々がたくさんおり、自分の世間はまだまだ狭いと思ったりします。



[写真1]

臨港中学校区地域教育会議は、先生方や近隣の町内会さんをはじめ、非常に熱心に活動しており、平成16年に「読売教育賞最優秀賞」を受賞しました。[写真1]は、読売新聞社の本社での授賞式に参加し、記念撮影したものです。当時、高円宮妃殿下がいらっしゃってパーティーで一緒した記憶がございます。報奨金も50万円出まして、子ども達のためにもっとよりよい取組をしようと気持ちを新たに皆で大層喜びました。

### (3) 仕事・人生のなかで苦勞した点、“やりがい”など

人生を振り返って苦勞したことや大変なことはそんなになかったように思うのですが、我々の仕事の苦勞といえば、我々の仕事は、建設工事の最後の仕上工程にあたるので、前工程が遅れてくると、引き渡し時期や商業施設でいえば店舗のオープン日はどうしてもずらせないので、我々の工期が短縮されてしまうわけです。工期が短くなったからといって、いい加減な仕事をするわけにはいきません。短期間で確実に仕上げるということが、苦勞といえますか辛いところではあります。

私の得意な技法やこだわりとしては、これまで紙や織物など自然素材を使って手作業で張る仕事をたくさん行ってきま



したので、そうしたものを扱う機会が減った最近の職人さんよりは、得意な方なのかなと思っております。

私にとっての“ものづくりの魅力”、“やりがい”というのは、日曜大工にしてもそうなのですが、頭のなかでイメージしたものを形に表すことができるということだと思います。また、出来上がったものの出来不出来を見ながら、「次はこうしよう」「今度はこういう風に作ってみたらどうだろう」と創意工夫が生まれ、それが向上心につながり、飽きずにいつまでもいろいろなことに挑戦する心持ちでいられることも、私にとってもものづくりの魅力の一つです。

私は、父親を6歳のときに亡くし、母子家庭で育ちました。母は4人の子どもを身一つで育て上げ、ときに父親代わりとなって、一人二役をこなしながら、愛情深く見守り育ててくれました。そんな母親なので、私はとにかく母親が好きで大事でたまりませんでした。15歳で家を出て住込みで働き、大好きな母親になかなか会うこともできず、そうして18歳のとき、母親が48歳で亡くなってしまったのです。親に反発して困らせるとか、親が年をとってきて世話がやけるようになったり、親の面倒を見たりですとか、そうした時間を一切過ごせずに死に別れてしまったものですから、親に対して良い思い出しかないのです。そういうわけで結婚してから、そんな親への想いを家内へぶつけて求めるようなところがありました。結婚して4～5年くらいは、家内から「私はあなたのお母さんにはなれません。」とよく叱られました。最近やっと家内と対するとき、母親のイメージにとらわれずに接することができるようになりました。

#### (4)かわさきマイスターの活動

川崎市は、かわさきマイスターの活動に非常に熱心に取り組んでおり、さまざまなイベントや実演会などが催されています。本日、この講座にお招きいただいたように、私も声をかけていただければ、できるだけ応えるようにしています。そういう場では、立派に紹介いただいたり、かなりオーバーに説明されることもあるものですから、私にはちょっと居心地が悪く、私としてはもっと皆さんにざっくばらんにお話したいと思ったりもします。ただ、そういう場を与えてもらうと、自身の仕事を改めて振り返る機会にもなり、マイスターの活動は私にとって非常に有意義な活動になっています。

#### (5)クロス張りの実演

それでは、これから実演に入っていきたいと思います。本日は佐藤 達也氏に手伝ってもらい実演を行います。佐藤氏は、私のお弟子さんにあたるわけですが、彼は我々業界の競技グランプリ・関東大会にて3年前に優勝した腕前を持っています。その関東大会に出場するにあたり、指導を依頼されたことがご縁で弟子に入っていただきました。その後彼は、全国大会にも出場し、3位に入賞しています。腕利きのプロがそろりな全国3位になるとは非常に大変なことです。ご自分でも「いんてりあ さとう」という会社を立派に経営されている方です。それでは始めていきたいと思います。

ここに付けてあるのは、織物クロスです。私が小僧の頃は、壁紙を張るといって、織物クロスや和紙がほとんどで、一部洋紙もありましたが、洋紙の場合は輸入材のフランス壁紙などでした。どのお宅にも応接間が一間あり、その一室には織物クロスを使うなど内装にお金をかける風潮だったように思います。最近では、織物クロスを使う現場は、商業施設が多く、結婚式場や葬祭場によく使われます。また、ごく一部の富裕層は織物クロスを使います。



[写真2]

こちらに張っているのは、着物を染めるための型紙です。三重県鈴鹿市に伝わる手彫りの「伊勢型紙」は、世界的にも非常に有名で高価なものです。これは群馬県桐生市に行った際に手に入れた型紙です。かつて5大銘仙産地の一つにも数えられた「桐生銘仙」は、今ではもう作られなくなり、染め物屋さんの多くが廃業してしまい、こうした型紙が手つかずで残っていたりします。この型紙は、以前有名な設計士さんに依頼され、裏に白い和紙を張り、ガラスに挟み込み、玄関の欄間に取り付けました。光があたるとステンドグラスのようで、良い雰囲気を出し、とても美しかったです。

こちらは銘仙です。銘仙は、平織りの絹織物で、当時の女性の普段着やお洒落着として非常に流行ったそうです。大正ロマンを代表する着物で、懐かしく思われる方もいらっしゃるでしょう。当時としては、色使いや柄がとてもモダンだったので

すね。銘仙をはじめ織物を壁紙にする場合、織物は水分を通してしまうので、裏に和紙を張る「裏打ち」という加工を必ず施します。裏打ちは、周りだけ糊付けして張っており、和紙を使うことがほとんどです。例えば、洋紙で裏打ちした場合、水分を含むと伸びてしまいます。和紙の良いところは、水分を含んでもあまり伸び縮みしないので、安定させるにはもってこいなのです。それに薄くて丈夫という利点があります。厚いと生地との風合いを損ね、ゴワゴワしてしまいます。ですから、裏打ちに使用するのはほとんど和紙なのです。和紙は、「楮(こうぞ)」とか「三桠(みつまた)」などの木の皮をはぎ、繊維を叩いて細かく分解し、これにトロアオイの粘液を混ぜ合わせ、紙漉(す)きを経て完成します。



[写真3]

これは、「リアテック」という(株)サンゲツさんの商品のサンプルです。メタリック調のキラキラした壁紙で、エレベーターの扉やホテルのロビー、浴室の壁などによく使われます。タイル張りの浴室はカビが生えやすかったりしますが、プラスチック板にこのような壁紙を張ると、防カビとなり浴室リフォームに最適なので、最近随分利用が増えていきます。興味がある方は、後でご覧になってください。

さて、いよいよ実演に入っていきたいと思います。私が壁紙に糊(のり)付けを施し、佐藤さんに張ってってもらいます。職人の技術というのは、昔は企業秘密だったのですが、最近はどうもオープンにしています。本日も皆様いろいろ観ていただきたいと思っておりますが、時間に限りがあるため、ほんの少ししかご覧いただけられないかもしれませんが、どうぞ近くにお寄りになってご覧いただければと思います。



[写真4]

使用する糊はデンプンで、国産のものは小麦からとったデンプン100%です。刷毛は、熊毛はもうほとんど使わず、今はナイロン毛です。動物の毛は、熊や馬の尻尾、豚の毛などいろいろありますが、これらは全て四六時中使っていないと毛が抜けてしまいます。一方で、ナイロン毛は腐らないので、毛が抜けにくいのです。昔は、このような刷毛を使って糊付けするのが普通でしたが、今はほとんど機械で行います。ですから、刷毛を使う機会が少ないため、放っておくと傷んでしまい、動物毛があまり使われなくなりました。本日は、特殊なデザインのものなので、刷毛を使って糊付けします。

糊付けにはちょっとしたコツがあります。皆さんは糊を付けると、乾いたらいけないとすぐに貼ろうとしませんか。ところが、糊を付けたらちょっと時間を置いてやるといいのです。張るのに適した状態になるまで糊付け面を合わせて置いておく時間を、「熟ませ時間」又は「オープンタイム」といいます。この壁紙の場合、裏打ちは和紙ではなく、機械漉きの洋紙を使っ



[写真5]

ており、水分を含むと伸びるため、伸ばすだけ伸ばしてから張るのがコツです。伸び切る前に張ってしまうと、さらに伸びようとして皺になってしまうのです。この壁紙は特殊なもので、紙を印刷してコーティングした上に、ピロードのようなものを植毛しています。表面が少し盛り上がり毛足もあるので、そのまま張るとずれ動いたりするので、少し時間を置き、表面はそのまま紙だけ伸びて素直になるまで待ちます。素直にならなかつたらどうするか。大丈夫です。子どもの教育と同じで、愛情をかけて見守ってあげれば必ず素直になります。



さて、オープンタイムをとったら、これから佐藤さんに貼ってもらいます。この壁紙張りは、産業技術短期大学(最寄駅:二俣川駅)で行われた技能者のためのコンクールの課題の一部です。時間の都合で、本日は裁断を事前に済ませ、張る作業を皆さんに見ていただきます。通常は、こんなに細かく切って張ることはなく、いわゆるデザイン張りというものです。

(佐藤氏)今やっている作業は「柄合わせ」です [写真5参照]。壁紙を張る際、今は石膏ボードの上に張ることが多いです。壁紙張りの基本は、カッターの刃を折ることです。壁紙を一枚張るごとにカッターの刃を折り、一日何十本も折ります。刃を折れば、カッターの刃を研がなくてよいわけです。空気を抜く際は、真ん中から放射状に空気を抜いていきます。紙は横に伸びる性質があるため、基本的に縦にローラーを動かして空気を抜きます。この台はちょっと安定性が悪いので、固定されていないと張りづらいですね。

(伊原氏)壁紙張りは力の加減が重要なので、安定したところでないとやりづらいわけですね。空気を抜く際は、結構力が要ります。空気が抜けない場合、力加減が足りないのです。

これは、「糊盆」という糊を入れておく桶みたいなものです。材料によって糊の濃さを変えるため、いくつか糊盆を用意します。本日は3種類の糊を使います。

この壁紙に使っている紙は、漆で染めています。銀色と鉄色の独特の色合いで、説明がなければなかなか気づかないでしょう。漆和紙をこの大きさに裁断し、「市松張り」という張り方をしています。「市松」という名前は、江戸時代の歌舞伎役者の舞台衣装に由来するそうです。

今回、本来1枚で張るところをわざと2分割して張っています [写真6参照]。これは「ダブルカット」施工という壁紙のジョイント方法です。ジョイントには、他に「突き合わせ張り」があり、その名のとおり壁紙を隙間なく突き合わせて張る施工です。ダブルカットの場合、重ねて張り合わせる際に下にする壁紙に糊が付着するため、糊が付着しても問題ないよう養生テープを入れます。壁紙は、このような小さいものを張る方がかえって難しいです。また、角を切るところがポイントです。それから、重なったところを2枚同時にいっぺんに切ります。カッターを使う際は、必ずカッターの刃が見える状態で行います。検討で切ると失敗します。



[写真6]



[写真7]

私が小僧の頃はカッターなどなかったので、このような小刀を使っていました [写真7参照]。小刀はカッターのように刃を折ることができないので、切れ味を良くするにはとにかく“とぎ石”で研ぐしかありません。ヘラを使いながら小刀で切るのですが、作業に時間がかかりました。ただ、昔の刃物の良さは下地を傷めないことです。また、1、2枚切るならカッターでもよいですが、厚みのあるものは内側に刃が入り、切り口が斜めになってしまいます。そういう場合、裁ち包丁を使います。裁ち包丁は、一方が膨らみ、もう一方がべたつとした片刃の包丁で、膨らんだ側が向こうになるように握り、いっぺんに切ることができます。





[写真8]

これは、壁紙を裁断する際、抑えるときに使う文鎮です[写真8参照]。腕が3本あれば相当良い職人になれますが、2本しかないので文鎮が重宝します。小僧の頃、裁断がうまくいかないと細かい端材が出たりします。これを我々は「おそぼ」と言います。そういうとき、「お前おそぼを作りやがって」と、竹の三尺差してパチンと叩かれたものです。今では体罰となり問題になります。当時は「ひどいことしやがって」と思いましたが、「ちくしょう」「今に見返してやるぞ」と原動力にもなり、今になれば叩いていただいた人に感謝しています。



[写真9:完成]

壁紙の耐久年数は、メーカーでは7年としています。ただ、実際は7年で張り替える方はほとんどいません。店舗などでは模様替えのために3年程で替えたりもしますが、一度張ると10～15年替えられないこともざらです。これは完全に賞味期限切れで、こうなると剥がれなくなってしまう。壁紙は張替えを前提にした商品なので、粘りがあるうちに張替えしていただかないと、パリパリになってしまうのです。剥がすのには結構手間がかかり、作業がかなり大変になります。

皆さん本日お帰りの際は、仕事の合間に作ったカードケースを持ってきましたので、お一つずつ好きなものを選んでお持ち帰りください。皆さんもきれいな包装紙が手に入ったときなどは、是非空き箱などに張ってみてください。ものづくりは楽しいですよ。今日は本当にありがとうございました。

**【質疑応答】**

**Q: 燃えにくい壁紙はどんなものですか。**

A: ビニールクロスです。施工性も非常に良いです。「不燃認定壁紙」という燃えづらくしている壁紙もあります。

**Q: 壁紙は日本に昔からあったのでしょうか。**

A: あります。襖(ふすま)紙と呼ばれる、襖に上張りする絵が描かれた紙を壁に張ったりしていたということです。

以上